

前へ歩く

家族失ったけど 支えられて

東日本大震災では、岩手、宮城、福島県の千七百人余りの子どもたちが、両親を亡くした「孤児」、父親または母親を亡くした「遺児」になったとされる。「自分だけが取り残された」という悲しみを乗り越え、夢に向かって歩み出した若者も少なくない。

(戸川祐馬)

①「地域を支える看護師になりたい」と意気込む横田万弥さん＝宮城県気仙沼市で ②「街を復興する先頭に立ちたい」と語る菊地将大さん＝岩手県陸前高田市で

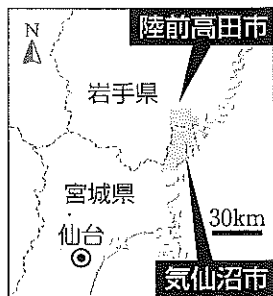
両親と姉、祖父の家族四人が津波の犠牲になった宮城県気仙沼市の気仙沼高校一年横田万弥さん(20)は、二歳上の兄、敬さんと親戚に引き取られた。だが、その年のクリスマス、友人宅から帰ると敬さんがいなくなっていた。一カ月後、海で遺体となって見つかった。転落したのか、自殺なのかは分かっていない。

「なんで私だけが残ったの」。そんなつらい思いを、担任教諭や保健室の先生がいつも聞いてくれた。お墓参りにも一緒に行ってくれた。高校に入ってから、友達のお母さんが毎日弁当を作ってくれる。埼玉県に住む伯母も時々、様子を見に来てくれる。

「親がつくってくれたつながりがあるから、私は生きていられるんだ」。孤独よりも、ありがたみを感じようになった。

人に支えられるうち、必要とされる人になろうと考えるようになった。思えば小学生のころ、体が弱かった祖母はたびたび救急車で運ばれた。そんなとき、医師や看護師たちはいつも献身的に診てくれた。

「私も故郷の人の役に立つ看護師になりたい」。今は、大学進学のために理系科目の勉強に励む毎日だ。「天国にいる家族に、前を



▼ 震災孤児・遺児 厚生労働省によると、2014年3月現在の東日本大震災の震災遺児は岩手488人、宮城871人、福島1555人。震災孤児は岩手94人、宮城126人、福島21人。約9割が親族に引き取られ、育てられている。3県とも一般からの寄付を基金とし、奨学金を支給している。毎月の金額は未就学児1万～3万円、小中学生1万～4万円、高校生2万～5万円、大学生・専門学校生3万～6万円。あしなが育英会(東京)など、財政的な支援をしている民間団体もある。

向いている姿、見てもうえ、同じような境遇の仲間と経験を共有し、親がいない寂しさを乗り越えてきた。

筑波大で法律や政治を学ぶ岩手県陸前高田市出身の菊地将大さん(20)茨城県つくば市は高校二年の時、津波で両親を亡くした。その後、被災した若者を支援する一般財団法人「教育支援グローバル基金・ピョンドトゥモロー」(東京)の奨学生となり、進学した。

東北を離れると「別世界」だった。震災孤児として特別視してほしかったわけではないが、友人に震災のことを話しても理解してもらえなかった。そんな中、奨学金の支援団体が行っているリーダー養成プログラムに参加、同じような境遇の仲間と経験を共有し、親がいない寂しさを乗り越えてきた。

震災の体験を話す機会も増えた。自分では備えることの大切さを訴えているつもりだが、話し終わると「負けないで」「頑張ってください」と励まされる。

仙台市で十五日にある国連防災世界会議でもスピーチする。訴えたいのは自然災害の犠牲者ゼロ。「犠牲者がいる限り、防災ができていないとはいえない。自分のような経験をする人がなくなるよう努力を続けなければ」。卒業後は地元に戻ることを決めた。記者として、故郷のために伝える仕事かしたいと思っている。